



今月の表紙  
草場 一壽さんの陶彩画

今月の表紙に掲載したのは「天照大神」の陶彩画。武雄市山内町の今心工房で制作を行う草場一壽さんの作品です。

“陶彩画”は、草場さんが独自に生み出した芸術。白い陶板の上に釉薬で絵付けを行い、窯で焼くという行程を、違う色ごとに十数回繰り返すという特別な技法を用いています。

それだけに、一つの作品に半年から一年もの時間を要すること。窯の温度や焼く時間など、制作中はまったく気を抜けないそうです。

窯から出すまでどんな色に仕上がるか分からない。しかし作者の当初のイメージを超える、素晴らしい偶然との出会いがあるからこそ面白い、と草場さんは言います。

そこには、自然とともに生き、いのちの存在に真摯に向き合いながら歩む中で育まれた、想いや願いのようなものが込められているようです。

## 編集前記 EDITOR'S NOTE

### まず、形から入れ!

いつものように、見出しが決まらず悩んでいると、いつの間にか背後に忍び寄っている大きな影。心なしか、これまで以上に眼光が鋭くなっているようです。そこで発せられた一言。

人口に膾炙したものは、それだけ人々の心に残りやすく、優れているということ。だから、まずはそれを徹底的に採り入れなさいというのが、そのココロでした。

いいなと思う物があれば、何度でも、自然にスラスラと作れるようになるまで繰り返す。いいなと思う人がいれば、服装や話し方など、何でもその人がやるとおりにしてみる。

そうすることで、ある「形」が自分の中に入り、次第に馴染んでいく。「形」を完全にマスターしたら、そこから自分の色を出していけばいい。なるほど、そうかと納得させられました。

思えば、広報武雄も様々な「形」を採り入れて進化し続けてきました。しかし、まだこれが広報武雄だ!と言えるまでにはなっていない気がします。

今後も採り入れるべきさまざまな「形」を求めて、試行錯誤の日々は続きます。